

Title	同級生対談『あのね あのさ』：2018.4.26
Sub Title	
Author	一青, 窈(Hitoto, Yō) 小高, 奈皇光( Kodaka, Naomitsu)
Publisher	慶應義塾大学工学部
Publication year	2018
Jtitle	人間教育講座：社会を知る自分を知る自分を育てる (2018. ) ,p.69- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20180000-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20180000-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2018.4.26

同級生対談

『あのね あのさ』



歌手

## 一青窈

ひととよう（二〇〇〇年環境情報学部卒）

東京都出身。台湾人の父と日本人の母の間に生まれ、幼少期を台北で過ごす。

二〇〇二年、シングル「もらい泣き」でデビュー。

翌年、日本レコード大賞最優秀新人賞、日本有線大賞最優秀新人賞などを受賞。

五枚目のシングル「ハナミズキ」、そして初のベストアルバム「BESTYO」が大ヒットを記録。

二〇〇四年に映画「珈琲時光」、二〇〇八年に音楽劇「箱の中の女」で主演をつとめるほか、二〇一三年に初の詩集「一青窈詩集 みんな楽しそう」を発表するなど、歌手の枠にとらわれず活動の幅を広げている。

二〇一七年一〇月にはデビュー十五周年を迎えた。



Tokyo Oraku Mode Inc. 共同創業者 CEO

## 小高 奈皇光

こだかなおみつ（二〇〇〇年総合政策学部卒）

二〇〇〇年、メリルリンチ投資銀行部に入社。電通グローバルIPOやソニーの大型転換社債（二千五百億円）、大成火災の会社更生計画（現損保ジャパンへの統合）など多数の案件に携わる。

二〇〇六年、株式会社ガイアックスのCEOに就任。自社株TOBなど資本政策の他、M&A・人事・経営企画などを管轄、フィリピン及びシンガポールの子会社設立も主導した。二〇一一年には厚生労働省「両立支援ベストプラクティス推進事業」委員を務める。

二〇一二年、Tokyo Oraku Mode Inc.の共同創業者として法人設立。同年米国500 Startups から資金調達を行い、二〇一三年に同社は第一回 Japan Startup Award グランプリを受賞。二〇一四年にCool Japan Fundより第一号案件として投資を受け、二〇一五年にはアリババ社の天猫国際に开店し中国市場に参入した。二〇一八年にはブロックチェーンに基づいたオタクコイン構想を発表し、コミュニティ通貨としてオタクコインをローンチ。現在 Tokyo Oraku Mode の Facebook ファン数は二千万人を超え、世界百三十カ国以上に日本のカルチャーと商品を届けている。

慶應大学総合政策学部卒、University of Pennsylvania - The Wharton School

Executive Education Program 修了

## 【まずは、自己紹介】

一青…本日、平日の夕方、貴重なお時間をくださってありがとうございます。簡単に申しますと、私の職業は歌手で、そして奈皇光は……

小高…会社役員です。

一青…お互いに卒業してから親睦を深めていった感じで、簡単に言うとは友達です。

小高…そうですね。

一青…今日は、一年生はどれぐらいいますか？

小高…おお、多い！

一青…二年生？ 三年生？ それ以上？（笑）なるほど。私たちがここにやってきた目的は、みんながこれから夢を持って勉強していったって、こんな風に生きていくと、そんな風に職業に就けて楽しく生きていけるんだな、ということを、例その一、その二として知ってもらえたら嬉しいなと思います。それで、私たちに共通しているところは、とにかくやりたいことを……

小高…やっている。

一青…これにつきます。もちろん、やりたくない勉強を全部やらなくていいということではなく、やりたいことを満遍なく勉強していく中で、すごく好きなことを見つけて続けるっていう力が一番大切です。それで、なんで歌い続けられるのかと、なんでメリルリンチに行ったのに、今はオタクモ-

ドという会社でやっているのかを、説明出来たらいいなと思います。

小高…そうですね。じゃあ笈ちゃんのこととは皆さんご存知だと思いますので、小高奈皇光という人間をですね、三分ぐらいで簡単にご説明できればと思います。私、まず、五人兄弟の末っ子で生れまして、親が頑張ったみたいで五人目として運よく生を受けました。でも途中からです、小学校時代に僕の誕生日も忘れられたりとかして、子供心に傷ついて「もう、好きなことやろう」ということはそのころからありました。それで縁がありました。九六年に〇〇〇〇に入学いたしました。

一青…総合政策学部？

小高…総合政策学部ですね。

一青…最初は何になりましたか？

小高…最初は…ふつうは高校二年生ぐらいで進路を考えるとと思うのですが、当時は、すごくやりたい事というのはなかったんですよ。学校の勉強に少し疑問というか、ずっと全部勉強してセンター試験というよりは、もうすこし学問を総合的に、いろんな分野を学んだうえで、政策判断をすべきじゃないかという、若い思想がありました。そのときに総合政策学部という新しい学問が生まれるらしいところ、そこにいききたいなと思いました。

一青…でもここにいらっしゃるみなさんは理工学部がほとんどですよ。理工学部以外の方はどれぐらいいらっしゃいますか？（観客に）あ、じゃあ何学部ですか？

観客…文学部です。

観客二…法学部の法律学科です。

観客三…商です。

一青…もうみんな割とやりたいことをやってるんですね。

小高…おう、すごいですね。

一青…何学部ですか？

観客四…文学部です。

一青…もう、高校生の時からここに行くぞと決めて入ってきたわけですよ。その点でちよつともう中々のもんだと思います。

小高…ちなみに実は、文学部も受けました。セカンド志望は作家だったんですよ。

一青…ああ、なるほど。

小高…自称、文才がありまして。(笑) これはいけるんじゃないかと思つて。途中で切り替えてますけど。それで、大学に入って、蛸ちゃんはKOEっていうアカペラのサークルですごく活躍していて、僕は色んなことをやりたいなと国際関係とかいろいろやった後で二〇〇〇年に卒業しました。ここから先、話すとまた長くなるので、大学の時までには、僕はこういうキャリアとかSECに入学して卒業したという人間ですね。

一青…そもそもみんなから見て総合政策学部、環境情報学部ってすごく遠くの学部で、何をしている人たちなんだろうって思つていと思うんです。当時、未来からの留学生っていうキャッチ

フリーズがついていて、とにかくこう、まずパソコンを使わせてみたら、どんな子に育つんだろうっていう実験的な学部でした。九六年に入学した当時、パソコンはまだ立ち上げるのに二、三〇分かかって、マトリックスみたいな緑色の文字がばあああって流れて、それを眺めながら「これ、いったい何につながるんだろう？」って思っていました。まだフロッピーの時代から今のiPhoneまでを全部経験している。とにかく文・理の垣根を越えて全部の学問を勉強しようよというのが特徴的な学部で、私もそれがいいと思って自己推薦入試で入りました。やっぱり、入試の時には歌を歌いました。本当は、奈皇光と同じで早稲田の理工に行きたかったんです。

小高…え？ほんとうに（笑）？

一青…早稲田の建築で、空間設計を勉強したかったです。私は両親が小さいころに他界したので、その影響からミュージックセラピーというのをやりたいと思って。じゃあまずは空間づくりをやるうと思つて建築学部を志望したんですけど、いろんな面で学力が及ばず、一浪し、そこから自己推薦入試という形で環境情報学部に入りました。

小高…建築だったんだね。

一青…そうなんです。

小高…へえ。知らなかった。

一青…その時に勉強したことが、今生かされていないかというところではなくて。例えば建築やデザイン系の雑誌のインタビューだと、すごくインタビューと話が盛り上がる。そういう依頼を受



けた時に、普通に歌が上手くて歌手になった子よりは、そういう仕事が好きでできる。そしてさらに、そこから得た知識でまた詩も書けるっていう、行ったり来たりができるわけですね。なので、あの、奈皇光みたいに……最初、メリルリンチだっけ？

小高…そう。

一青…金融について……からのオタクモード。

小高…そうですね。では次に僕の社会人以降を簡単にいきますと、就職活動中の方々もいらっしやるんですね？ 今、就活の方？ お！ がんばりましょう！ いけますいけます。

一青…ネクタイだもんね（笑）

観客…あざーす！

小高…大学時代にいろいろやった中で、大学四年生の時に窃ちちゃんと違って、これ絶対にやるぞっていうのは、なかなか見つからないと思うんですよ。

一青…それはそうだ。

小高…見つかる人のほうが逆にレアというか。「絶対に地雷撤去するぞ！」とか見つければNPO作って人生をかけると思うんですけど、いろいろ勉強して、でもまだ見つからなかった中で、僕はちょうど金融の色んなところに流れ着いて、研究室にも入ってて、社会でこう一番ド詰めしてくれるような会社に入ろうと。

一青…え？ どづめ？

小高…僕のことをこう、叩いてくれる、別にドMじゃないんですけど。僕の世代の時は、どれだけこう、厳しく厳しくやってくれるか。それで、当時二〇〇〇年入社時代、外資系投資銀行、契約二年で、だめだったら一年でクビ。最高の条件だなと。

一青…それ、ドMっていうんでしょう？（笑）

小高…あれ？　こんなすばらしい環境で、メジャーリーグとは言わなければ、ダメだったらクビっていう激しい環境にいまの二〇代前半に行かなかったら、もうあとから、四〇、五〇になったらなかなか大変じゃないですか。なので第一志望は外資系投資銀行で、ゴールドマン・サックス、モルガンスタンレー、メリルリンチ、JBS、ドイチエ全部受けて最初にメリルリンチからオファーが出た瞬間に他は全部やめて、ここだ！　って思って。というふうに入りました。

### 【マニュアルよりもプレゼン力】

一青…その入る時の面接では、どんなことをしたんですか？

小高…これはですね、（観客見て）就活の方ですよ？　僕がまずやったのは、マニュアル本は一切読まなかったですね。読んだら…ごめんなさい、もう読んでる方いらっしゃるかもしれないけれど、当時だと面達『面接の達人』とかいろんな本があったんですけど、そもそも読んだ瞬間にマニュアルをプレイすることになるなと。そもそも差別化できないので、今からでも読むのをやめたほう

がいいと思います。

一青…なるほど、面接官側からして、その同じプレゼンの人たちよりは、ちょっと変わった方がとりあえず面白いと。

小高…そうですね。もちろんそれにはリスクがあるんですけど、そのリスクをこいつちよつと目立つてるからとかめんどくさそうだからというような会社は行かなくていいです。

一青…ほう！

小高…それって、入社した後も金太郎飴を求めてるような社風だと思うので。なので、みなさん勉強されて慶應に来ていらつしやる方々はですね、ぜひ個を出していただきたいし、そうしないとLに負けると思いますこれからの時代はなおさら。だからマニュアル本を読む時点で遅い、やめたほうがいい。そうすると結果的に考えるわけですよ、志望動機とか。なんでだろう、なんで俺DMなんだろう（笑）、DMじゃないんだけど…とか、なんで俺は鍛えて欲しいんだろうとか自分で考える。そうやって思考内で結果的に面接を繰り返すことで、自分のプレゼンテーション能力が上がっていくという。それが良かったのかなと思います。

一青…私は、最初に自己推薦入試だったので、そこで自己アピール力をすごく要求されました。それがないとまず大学に入れないから。

それから、とにかく私は歌手になりたかった。二十六でデビューしたんですけど、そのころは十六・七ぐらいから、すでにモーニング娘。とかがデビューしていて、十八だともうおばさんなわ

けですよ。そこから『ASAYAN』みたいなオーディション番組に出て、受かるわけがない。もちろん小室哲哉さんのオーディションも受けましたが、落ちました。すべてのレコード会社に振られました。日本のレコード会社と事務所に断られて、次に行ったのが、台湾です。台湾でも全部断られました。私は年を取り、みんなは就活をし……一青窈、歌手になりたいといつまで言ってたんだと。みんなから、この娘大丈夫かしら、生きていけるのかしら、と思われる中、それでも、私は詩を書いて歌いたいと思っていました。で、大学時代に何をやってたかというところ、詩を書いて、実名、当時住んでいた実住所、そして実メールアドレスを載せた小冊子を作って配布してた（笑）。詩に対していいと思ったデザイン画を自分で描き、これを当時スピードの遅かったプリンターでプリントして、ホチキスで留めて、渋谷のBEAMSだとかに手で撒いていたわけです。それで誰でもいいからこの詩を見て、私に曲を付けてくれないかなと思ってた。ある時はここに自分の携帯番号も書いていました。

小高…それって何年ぐらいのころ？

一青…大学一年ぐらいから。こういう風に自分で絵を描いて詩を書いて。ほんと当時そんなことしかできないの。絵とかデザインって。当時からこだわってたのは、詩の改行とかなんですけど、このころから私の表現の仕方は、変わってないんです。今『もらい泣き』とかを見てもらうと多分、一青窈って変わった改行とかしてるんだなって思うとおもうんですけど、詩を読む時は、ただ普通に文字が並んでいるよりは、こういう改行の方が目で読んだ時のリズム感があると思ってて、

それと歌った時の区切り方はそれぞれ別に存在してると思ってるんですよ。それを私は伝えたくて。絵も、「もし『もらい泣き』という曲でデビューするならば、こんなジャケットで出ようかな」と思っ  
て自分で絵を描いたりしました。そういうのを二〇個も三〇個もいっぱい描くわけです。デビュー  
した後には、一青窈デビューしますっていうチラシみたいなものをテレビ局とかラジオ局とか、いろ  
んなところに撒くんですよ。これも自分でデザインを考えて。

小高…すごい。

一青…デビュー前は、自分のことを分析して、詩を書いて、絵を描いて、プレゼンして……ってい  
うことをただひたすらにやっていました。それで、音楽だったらシェリー・フオード・ペインが好  
きなんだとか、写真家だったらニック・ナイトだとか、一青窈ってどんな人なんだろうっていうも  
のを目で見てわかるように作って。これは振られた全員の人にプレゼンしていました。こんな風に才  
能がある、こんな風に歌いたい、こんな詩が書ける。なぜあなたは私をデビューさせないんだ！と。  
事務所の社長にもファックスの印字用紙が無くなるほど詩を送っていました。「君が詩を書きたいの  
はわかった！紙が無くなるからもう送らないでくれ」って（笑）。印字用紙がないなら手紙を書き  
ますって、今度は手紙を死ぬほど書きました。もう一〇通二〇通百通。もうウザい、君はウザい、  
ウザいが反転して好きだ、みたいになるのを狙ってました。それで、結果好きだと反転したのが当  
時のコロムビアミュージック（現・日本コロムビア）のディレクター。その人が、誰ももらって  
くれない私を拾い上げてくれた。当時は、小室サウンドがガンガンに売っていたので、こんなに声が

低くて歌詞が分かりにくくて、早い歌が歌えない子は要らないと言われていた時に、そのディレクターが「わかった、頑張ろう」と言ってくれて。二年ぐらいデモテープを作ったのかな？ で、そこに『ハナミズキ』や『もらい泣き』もあって、やっと世に出ることができました。なので、うっとうしいほどの情熱を誰かに伝えれば必ず伝わります。こんなに頑張ってるんだけど誰もわかってくれないなって事はないです。絶対に絶対に伝わります。伝わらない場合は、きつと足りないんです。詩を書いている量も足りない、手紙を書いている量も足りない、本を読んでいる量も足りない、映画を観てる量も足りない、すべてが足りないから認めてもらえない。だから、誰にも負けないって位まで好きなことを突き詰めると、こんなおかしな人になれます。なりたいかどうかは別として（笑）。

小高…すばらしい。すばらしい。

一青…奈皇光の場合は、私とは違って…あ、同じだ。やっぱりやりたいことがあって…。

小高…まあ、そうですね。でも今の話の後だとすごく話づらい。私なんかの話は。窈はホントすごいし、思うのは、やっぱりこのパッションがすごく大事だな。

一青…そうなの。

### 【努力は情熱に勝てない】

小高…あのね、僕がすごく好きな言葉があって、「努力は情熱に勝てない」と思うんですよ。つま

り好きじゃないものを頑張ってやる努力するって自分で感じていた時点で、結構無理してるんですよ。それはいろんな社会に入るフェーズで必要なだけだけでも、努力して部長と仲良くなるとかね（笑）。努力して勉強して入試受かるとか多分面接も努力して、だけれども人生を考えたら、いちど生を受けてですね、全うするにあたり、好きなこと、情熱をかけられること、パッションが注げることにやらないと絶対後悔すると思いますね。

一青…それで、かつ、うつつとうしいほどの情熱って、自分を信じてないと思わないと思っんですよ。私はとにかく、絶対に歌手になるって信じてたんです。そういった情熱は、若ければ若いほど持つの特権だと思ってる。自分は絶対この世界で、誰も見たことのないロボットを作るんだ！ でもいいし、誰も見たことのない細菌を発見するんだ！ でもいいですよね。その自分を信じることに賛同してくれる仲間を見つげるところが私は大学だと思ってます。当時、やっぱり奈皇光もそうなんだけど、窈ちゃん歌好きなんだ歌手になりたいんだって馬鹿にされてたら、多分大学とは違うところに友達を求めてたと思うんですよ。でも、今私の周りにいる友達は、今回この講座に呼んでくれたウツシー（牛場潤一准教授）もそうなんですけれども、バンド仲間で、やっぱり好きなものを温かく見守ってくれる、馬鹿にしないでいてくれる人達なんです。大学に入らなかつたら、こんなにたくさん味方がいなかったらどうなってしまうんですよ。

小高…ほんとそうですね。だって、慶應ってすごく、SECもそうだしここ理工学部もそうだと思うんですけど、全然そういう人っていないなかつたよね。まわりに否定する人がいなかった。

一青…いいいいない。

小高…みんな好きなことをやってきたし、大学四年の間で好きなことをやらなければ、いつ好きなことをやるんだってずっと思ってた。

一青…かつ学生っていうサーティフィケーションがあれば、講義を受けられたりとか、それこそ学生割引でかなり安くいろんなものが吸収できるじゃない。

小高…いろんな社会人の人の話も、これもそうだと思うけど聞きに行くことができるし、学生と違うことで変に社会人相手だと営業されるのになんて思いがちなんだけど、ピュアな目で接してくれるので、すごくチャンスのある期間だと思いますよね。

一青…みんなサークルに入ってますか、入ってない人っていらっしやいます？ あーいるんだ…それは興味持てるものがなかった？

会場から回答…自分のやりたいことがあったので…

一青…素敵ですね。

小高…さすがですね。悪くない。

一青…私は入学した時にサークルの勧誘がいっぱいあって、欲張りだから、一〇個ぐらい入ったんじゃないですかね。よくわからないまま、広研とモダンシャツクスっていう音楽サークルとかにも、とにかく友達を百人作ろうっていう位の勢いで入りまくり、最終的にはNOEと三個位に落ち着いたんですけれども。



小高…ドゥルーベもやってたんですね

一青…ドゥルーベっていうダンスサークルもやりました。何でもいから友達の友達とのつながりで自分の歌手になりたいって夢が実現できないかなって、その伝手をとにかく求めて。でも奈皇光は違ったのかな。

小高…僕はサークルは、最初二個ぐらい入って。アイセックって言う国際協力みたいな。

一青…そこがまず頭いいよね。

小高…頭いい…そういうことにしといていただいで。

一青…だつて入ろうと思わないから。

小高…だつて大学に入ったら国際交流したいなっていう。

一青…そこがもう志高いよ。私なんか彼氏できたらいいなあとか、甘い気持ちで入ったのもあるし。

(笑)

【パッションと食欲さが、やりたいことをやるための両輪】

小高…インターンシップってやったことある方？ あー理工学部って、あんまり多くないんだ。今インターンシップって言う言葉が定着して、学生時代から社会に行くってあるじゃないですか。僕はサークル入った後、九七年から、当時インターンという概念があまりなかったんですが……大学の

授業受け始めて、これって社会に出た方がより得るものがあるんじゃないだろうかと思いついて、大学ももちろん勉強の一つだけど、インターシップ的なものもしたいなということ、それこそアイセックを使って、観衆をいっぱい集めて、学生も実学を勉強すべきだってイベントを主催して、主催した僕だけ選ばれて企業に行くっていう完全に自己演出のためのイベントをやって……九七年からほぼ三年間ぐらい会社で、働いてました。話だけ聞くと、苦学生みたいな感じですが。

一青…でも、私、それって変わってると思うんだけどな。そんな人、他にいないよね。  
小高…当時はいなかったですね。

一青…やっぱりそれが五人兄弟の末っ子ならではの。

小高…そうですねもうリスク取らないと。自己主張しないと、「いたの？ 奈皇光」って言う風に毎回言われる。

一青…唐揚げは先に取る、みたいなね。

小高…そうそう。ホントにそう。ケーキのホールを分けるときに、どれだけ自分のポジション増やせるかって言うぐらい。

一青…でもその食欲さだよ、奈皇光は。私がパッションなら。

小高…生きていくための食欲さね。

一青…その食欲さを持って欲しいなって言うところちょっと説教じみた内容になるので、質問ある方いらっしゃるでしょうか。(笑) あ、どうぞ。



質問者…はいそうです。ただ学園祭に出るぐらいしかできないですけれど。それで僕の場合、倉木麻衣とかに負けて諦めてしまったんです。一青窈さんに聞きたいのは、心が折れないで続ける、これ（CD）見ると十五周年でしたっけ、それだけ続けられる事はすごいなと思ひまして。

一青…その…：ピアノを弾いて、アーティストのバックでピアノ弾きたいって言うことですか？それとも自分自身がピアニストとして、上原ひろみさんみたいに世界中のツアーに行きたいって言うことですか？

質問者…えーとまあ、小室哲哉さんみたいな。

一青…あープロデュース。

質問者…そうですね、それには憧れてましたけれど。

一青…過去形…：で良いですか？

質問者…そうですね。ただ引退したっていうの見てて、まだできるんじゃないかなって逆に僕は思いましたけれど。

一青…ピアノをやって小室哲哉さんのように今後何かしたいか、あるいはBOBEのように音楽業界にいたいかどうかという天秤で、どっちが重いかというと、どっちですか？

質問者…どっちかって言うと小高さん寄りの方に傾いてまして、メリルリンチとか電通とかみたいな、ビジネスエリートとかいうか…：さっきドMっておっしゃってましたけど、ドMでも折れないで続けていければ…、

小高…Mすぎて、しなっているかもしれないけどね。

質問者…でも最終的にはオタクって、攻めてるじゃないですか。最終的にやられても攻める方に転じれば、いいのかなって。後はあれですよねメルリンチを辞める時に勇気は要りませんでしたか？小高…じゃあ僕は、入社後の話を簡単にすると。皆さんいろんな人生があると思っていて、参考例としてなんですけれど。僕はメルリンチに二〇〇〇年に入りまして、さっきのような超過酷な最終的にYesiorはい！みたいな上司について、二十三時ごろに明日の朝までいいからとかって仕事振られて、はいわかりましたみたいなね。一日二〇時間位、月にたぶん僕四百時間ぐらい働いていたんですけれど、最高の感じでした。でそれ僕五年間ぐらいやっていまして、それでM&Aですとか、企業を証券取引市場に上場させるIPOであるとかのプロジェクトをやって…やらされていたんですけれど、その時僕が思ったのは、ビジネススキルは非常につきましたと。あと、いろんなお話ができたりですとか、にはなっただんですけれど…これを三〇年続けてやったときに、これが僕の人生ほんとに好きなことなのかとかイノベーション起こしてるかなという、違うなと思ったんですよ。イチ男子と生まれたからにはです、戦国時代大好きなんですけれど、織田信長みたいに、あ、別に人を殺したいとかじゃないですよ、世の中を変えたりとか、世の中のためになったりとかということをしたかと思ってるんです。でも金融ってというのはその手助けをしてるんですけれど買収とかも手助けだし、自分自身が何かを買収したりとか、事業を発生させているわけじゃなくて、野球で言うと敏腕代理人にはなれるんです、大谷くんをエンジェルスに入れますみたいな。でもプ

レイヤーじゃないんですよね、ビジネスでいうと。でも二刀流やりたいじゃないですか。世の中やっぱり非変革保守なので、ステイブ・ジョブスとかザッカーバーグとか孫さんとかやっぱりアントレプレナーなわけですよ。そこをやり切らない中であと三〇年小銭稼いだとして So What? みたいな。というのには五年ぐらいして気付きました。でも五年間すごく意味はあったと思うんですよ。ビジネススキルが身についたし。そこで自分で会社やろうとかやりたいと思ったので、やりたいことをやろうと改めて決心しました。悔いとかは一瞬たりともなかったですね。そう思った翌週に辞表出して、どうしたの小高みたいなの。

当時の小ネタですけど。その当時の社長と僕で写真を撮らせていただいて、新卒採用向けに小林さんと小高くんって言うフライヤーを作って配りまくってたのに、お前辞められたら困るよみたいな。(笑) こういうイベントに出るんだからさあ。て言うのはありましたが、やっぱり自分でやりたいうことをやった方が結果として自分に返ってくるかなと思ったので、何にも迷いはなかったですね。一青と同じくね、何にも迷いはないんです。多分私、倉木さんのデビューしたその当時、ホイットニーやマライヤより自分は上手いと思ってたので。でもそれってやっぱり若気の至りですよ。全然上手いわけではない。で、今もプロデューサーに言われるのは「一青、お前は歌は上手くない」。当時、宇多田さん、MISIAさん、椎名林檎さんとかたくさんいたのに、私が歌いたかったのはR&Bだったの、ホイットニーのカバーをしてプロデューサーに聞かせても向こうはポカーンですよ。全然上手くもないR&Bを聞かされて、なんだこの娘はって。でも、そこで言われたのが、「一青は上

手くないから、そうじゃない。台湾の血を探したらどうだ」と。「それは他の人にはないものだから」と言われて初めて中国語をもう一回勉強し直して、台湾に行つて台湾のレコード会社を回つて、台湾の民謡に出会う。台湾の民謡に出会つて「あ、これ私の血にある」つて思つて「ええいいあ君からもらい泣き」つていうコブシを。あれはホイットニーにはできない（笑）ね、できないでしょう。リアーナにもできないでしょ？ ファレル・ウィリアムスにもできない。というのに出会つたの。そこで初めて自信を獲得した。ずっと打ちのめされていたけど。だから、「俺、全然ピアノうまくない。でも倉木麻衣にはできない、俺節がある」つていうところまで模索してたどり着けば、俺の勝ち。やっぱり倉木には勝てないんだつて言つて他の道に行くのも、それは幸せ。なので私はしつこくしつこくホイットニーにはできないことを探し続けて、ホイットニーが亡くなった時には悲しんだという話ですが。

小高…ホントそう考えると可能性つてすごく無限大じゃないですか。

一青…無限大かつ……So what? だつて？ んつき奈皇光が言つてただけど、やっぱり私は根本に人を元気にする詩を書きたいんです。あの「私あなた大好き」みたいな歌を歌つて、たくさんの人の前で、アリーナで歌いたいとかそういうことじゃないですね。ここの教室の中で膝を抱えて、なんか今日すごく嫌なことがあつて何の言葉も耳に入らない、みたいなその人の肩を「大丈夫だよ」つて擦つてあげられる詩が、一行でも書けたらいいなつて思つてる。そうじゃない人は普通に元気に生きていけるんですよ。でも私はその「あーもう死んでしまいたい」みたいに思った人が「やっぱ

りおいしいご飯食べたいなあ」と思えるそのきつかけになる言葉が書ければいいなと思ってるんです。人はそれぞれの役割があります。例えば西野カナちゃんだったらそういう恋の歌を聴いてもっと恋愛頑張ろうって思うとか。その人にしか書けない詩があつて、私に書ける事は何だ？ ってなつた時、今まで生きてきたすべてを言葉にぎゅうぎゅうに詰め込んで「あのね大丈夫だよー。あのさあ私はこうだったよ」って言えるような詩を書きたいと思つて、これからもいろいろやるわけね。その中の全部を取る事はできないけど、自分にしかできないことを見つけるのにすごくすぐく大学は良いところだと思つてます。だから、理工学部に入ったけど本当はやりたいことが違つたならもう一回文学部を受け直したりしたつていいし、何だつたら「大学じゃなかったわ、会社に入ろう」でも全然いいんだよね。私はとにかく歌手になりたかつたから、早め早めに単位は全部取つて、四年ぐらいからは全然学校に行かないで、ずっとクラブで歌つてた。

小高…実は僕も単位は最速で取つて。一緒ですわね二人とも。(笑)

それで、ちょっとAO話に戻ると、例えばSFCつて言う場所はAOで入ってくる人が非常に多くて、窃は歌手AOなんだよね。

一青…そうだね。

小高…他にはあの、ほら、俺の友達は村長AO。

一青…なにそれなにそれ(笑)なに尊重してるの？

小高…違う違う村の村長さん。



一青…リスペクトじゃなくて(笑)

小高…究極のヨイショ！ どっこいしょ！ っつて(笑)リスペクトじゃなくて(笑)、地域文献とかコミュニティの中でどうやってとかと言う中で政治意識のコアみたいな所を当時十八歳でAOでプレゼンするっていうのはすごいですけども。いろいろいて、SECの場合は、AOの人の方が成績が良かったりするんですよ。やっぱり勉強かつAOで入るっていうのは、目立っているけれども、学校の成績が圧倒的に良いですと言うのがあって。加えて……

一青…私にとって良かったのは、個性だらけの人たちの中でさらに私は、芸能界デビューするKREVAさんもいれば、他にも色々いる。でもその個性の中でもずば抜けて「君なんだ」って言うてもらったために、あれこれ考えたのがさっきのあのタイポグラフィ。

小高…大事ですね。だからほんとにそのプレゼン力とか、そのプレゼン力のベースって自分の好きな事は何かとかそういうことがないと、さっきのマニュアル本を読んでとりあえず書くみたいなことになってしまう。それってね、社会に出るときに一定は必要だと思うけれど、やっぱりそのパッションが注げるものを、最大限プレゼンするっていうのは、大学の時からもう練習する機会がいっぱいあって、サークルの中で、例えばサークルの代表になりたいと思った時には、こうしていきたいっていうプレゼンをしてもいいし、それって一つひとつすごく大切だし、大事にしてほしい。

一青…いかがでしょうか？

二、好きなものが見つからないなら、文字にして書き出してみよう！

質問者二（高校生男子 Mさん）…

質問者…いま塾高三年生です。奈皇光さんと窈さんに、すごくストレートな質問なんですけど、パッションの対象とか好きなものってどうやって見つけるんですか？ 頭の中で好きなものとかふらふらしていて、なんなんだろうって思ってた、教えて欲しいなってます。

一青…好きなものって、書き出した事ある？

質問者…前にExcelにガーって打ち込んだ事はあって……

一青…あーだめだめ。だめっていう事は無いけどやっぱり肉筆って全然違うの。私も一時期パソコンで詩を書いてたけど、ペンで文字を書くとき、ここの脳内から、手で指先を使って書くまでに時間がかかるから、ここで推敲できるんだよね。だからパソコンでガーって打っていくとブログと一緒に、なんかね、自分の気持ちの垂れ流しなの。そこをこう自分の好きなものと向き合ったり嫌いなものってなんだろうって考える時間が、文字にして書くっていう時に発生するのね。人間の体って、すごくよくできてる。好きなものをまず書き出すのが、私は大切だと思ってます。私ね、（プロジェクトのところに移動）例えばね、これは私が書いたものだけど、こうやって好きなものや嫌いなものを紙の上にバーっと出す。で、わけわかんないと思うけど、スルメとか何言ってるのか、ガビーンとかなんかよくわかんないと思うけど。

小高…変態天才ってあるね(笑)

一青…多分ね自分のキャッチコピーを探してたんだと思う。スルメがすごく好きだったし、ガビーンてすぐなるとか、後おでこ広いとかオヤジキラードったのかな(笑)。こういうね、ファザコンとか書いてるけど、自分の嫌な部分とかも全部出して書いてくと、自分の傾向が見つかるの。よくamazonとかでも、物を買っていると、あなた他にこれ好きかもって出るじゃない。こんなの好きじゃないわって思う時もあると思うわけ。それを他人やコンピュータに任せるんじゃない。自分で本当に好きなものを、ガンガン書いて、自分の言葉にできない汚い感情も、言葉に出してくと、意外と自分ってこんな薄っぺらい人間だな、とか色々思ってたさらにまた悩めるわけ。そうすると奈皇光みたいに自分を追い込むことに、たかだかペンと紙一枚でチャレンジできるっていうね。(笑)

小高…すごい。

一青…お手軽にできる、好きなものを見つける。好きな子の名前を書いて、好きな音楽のタイトルを書いたりしていくと、どの分野に対しても一定の共通点が見つかる。そうすると好きな絵もわかるし、好きな建築家もわかるし、「あそうなんだ！自分ってオランダのデザイナー好きだったんだ」とか、わかってくるとね、自分の好きな会社も見つけやすいよね。じゃあ、オランダ系の会社に行こうとか。

小高…確かに。

一青…っていいことですが。どうですか？ 奈皇光さん。

小高…そうですね。窃は、ほんと、アーティストつすよね。なんか書き…：僕ですな自慢なんですけど、字がね無茶苦茶下手なんですよ。書き出したら自分でイライラしちゃって。

一青…まあ、そういう人はパソコンでも。

小高…まあそれは冗談、ネタなんですけど。やっぱり、わくわくするものとか感動するものっていうのは、大小あると思うんです。で、そこをちゃんとキャッチできる感度を持つてるかだと思うんですよね。で、あと大事なものは、いっぱい経験してもらってたほうがいいですよ。

一青…そうだね、経験に勝るものはないね。

小高…そう、いろんな体験をして、いろいろな人と会って、とりあえずイベントとか行きまくるみたい。このイベントに来てる時点で、感度があつてすばらしいんですけど。おれが学生だったら絶対行きますよね。

一青…え？ 行くの？ 私行かなかった。

小高…こういうイベント…：え？ おあ？ いろんな人に会えるかなとか、

一青…ほんと？ 私多分クラブとか行ってた（笑）。とりあえず今、音楽って。

小高…なるほど。でもほんとに、社会に出てもそれってすごくあつて。僕一時その、それもその四百時間働いてた時は行けなかつただけど、会社やつてるときに、毎週三つは交流会行こうとか。すると月に一〇何個とか行つてすぐに名刺が二百枚ぐらい連なつて。

一青…いっぱいになって、社会人向きだよなえー。

小高…友達の友達はみな友達だ的な、ただの他人なんだけど（笑）気付けば、すごい人脈広がるわけですよ。

一青…どうやってその名刺って整理するの？ だってわけわかんないでしょ？

小高…わかんない。

一青…で、どうしてるの？

小高…いまだと、エイトとかサンサンっていう会社の名刺管理アプリを使ったり…サンサンっていう会社は、実は我々の先輩が起業している会社なんだけど。

当時はね、名刺入れがね、なんか政治家とか経済とかなんかいろいろ分けながらやってましたけど。結局、何が言いたいかというと、いろんなイベントに行ったりとか、いろんな人の話を聞いていると「あ！俺、これ好きかもな」とか「これわくわくするな」っていうのに出会えるとおもうんですよ。そこが、どれぐらい自分のキャパがおつきいかでいいと思いますし、それが仮に今見つかんなくても、焦る必要はないと思います。

一青…そして多分、私はアナログ派、こっち（小高を指し）デジタル派だから。奈皇光は結構駆使してるよね？

小高…これはちよつとはずれるかもしれないんだけど、面白い話があつて。まあ俺、リアルも大好きだしバーチャルも最初わかんなかったんだけど、だんだん解るようになってきていて、ちよつと前にこういう形で、登壇してくださいって言うオフアアが来て「今回はVR登壇です」と言われた

んです。

一青…えへへへ。

小高…おっしゃってる意味がわかりません、と。(笑) えっ? VR登壇ってどういうことでしょうか。これが全部VR動画なんですよ。(手振りで見回す)

一青…えっ? お客様も?

小高…お客様も。で、登壇者はほかにもいて、VRでログインするんですよ。

一青…じゃあみんなパソコン…:…でどうやって…:

小高…みんなこういうこういうゴーグルをつけてVR空間にログインして、たとえば窺もVR空間にログインして、このゲストの人達はこっから先は来れないみたいな。物理的に。で、VR空間でここにディスプレイがあつて、デジタルにパワーポイント映写して、最後みんなステージに上がってくださってセキュリティが解かれて、あちらから記念写真撮りますって言われて。

一青…どうやって?

小高…で、みんな上がってきてパチって撮るみたいな。

一青…へえ!

小高…これって今までそれを経験してなかったら、好きかなどうかななんて全く解らないっていうか。でも僕が感じたのは、これってものすごくイノベーションは起きるかもなって感じるんだよ。すごい世界もあるんだっていうのは、感度をいかに保っていたりとか、色々なものに行ってみよ

うと思えば、今の時代どんだん新しいテクノロジーが起きてるんで。

これは何が言いたいかというところ、いろんなものに出会えることをしに行つて、好きとかわくわくするものを経験してもらつていうのも、特に今、高校生とか大学生とか、ぜひぜひやって欲しいなと思います。

一青…なんかね、その当時バブルがはじける直前だったから、ジュリアナの扇子をどこかで買つてきて、机をつなげて上に乗つてラジカセかけて「フウウウー！」つて踊つた。(笑)

小高…はっはっはっはっは

一青…単純に踊りが好きで歌が好きで、そんなのでも、こうして歌を歌つて食べていけてるんで、大丈夫ですよ(笑)でも、一貫してやっぱり音楽が好きだった。それだけかな。そのザックリつてした音楽から、詩を書くつていう小さい線に入つていくまで、すごく時間がかかったけど。でもやっぱり、何かわかんないつておっしゃつてるけど実は、小さいころから変わらずに続いているものがあるはず。

小高…ぼくは歴史が。だいたいオタクなんですけど、歴史小説を読んでもらうだけでワクワクが止まんないんですよ。

一青…今、オタクモードでも何か？

小高…なんたるな。戦国武将になつて僕、荒野を駆けたいわけですよ。

一青…戦国、三國無双的なね。

小高…そうそう。あれはやっぱもう、男の子としては首勝ちとりたいですよね。「突撃だあ！」って。

(笑)

一青…(笑) じゃあそれをいつか

小高…実現したい。

一青…ということでした。ほかに質問はございますか？

三、支援をするのに迷うことはない。まず現地に行ってみよう！

質問者 (商学部一年男子 N さん)

いま僕は、途上国支援に興味を持っています。ただネットなどで色々調べてみると、途上国支援はきちっと情報がないと、途上国支援をされる側に迷惑を逆にかけてしまうとよく書いてあります。ただ、自分としてはすぐやりたいんだという気持ちは強くて、この四年間で、一年生の夏休みにも途上国行って少しでも体験していきたいんですけど、やっぱりネットとか見ると「一週間行くだけじゃ支援にはならない」とか色々強いことが書いてあって、そこで迷いがあるんです。やっで良いのか、それともきちんと知識を蓄えてからやるべきなのかという葛藤があつて。

一青…やったらいいよ。

小高…ショートアンサーは JUST DO IT! だ。勝手な造語なんですけど PDCA っていう言葉あるんですね。PLAN DO CHECK……「めんなさい、覚えてないんですけど。この時代動きが速すぎるん



で、Pは後でいいんです。DCAP、こんな言葉ないんですよ、あの、面接で言ったら、何だこの人は、つてなっちゃうんで。JUST DO ITは、やってから考えるぐらいの、特に若いのであれば、行ったほうがいいし、ネットの情報はあくまで二次情報なので、自分の目で見たほうがいいと思いますね。で、そこでどう感じるかっていうところをまず自分の中で判断するっていうか、自分の中で咀嚼する。なので、迷う必要はないよ。行ったほうがいいです。

一青…そしてね、私は行っている。地雷除去も行ったし、311の被災地もそう。行って意味のないことは一個もないんですよ。それで行くと、そのネットで見た情報が「なあーんだ」って思える。こういう職業をしてみると「AIDSなんとかイベント」とか「地雷除去何とかイベント」だとか、色々お声掛けいただくの。でもその度に安全なところで歌を歌ってお金集めて、あとは知らんじやすごく無責任だなと思って。だったら自分が実際にそこに行ってみればいいと。どんな子達がどんなことで苦しんで、どんな物を欲してるのか…それが水だったら、ペットボトルの水なんか持っていてあげたっていいんだよ。で、この水じゃ足りないんだよって言われたら、じゃあ水を浄化する装置がどうやったら出来るのかな、じゃあNPOの団体はどうやってるのかな、とか、現地で聞けばいいこと。別に頭でっかちになって行かなくても、実際に行くと思えてくる。私最初ね、そういう途上国系の支援で、子供たちの写真がポスターで一面に出て「こういう、お金集めるための偽善的なポスター、あんまり好きじゃないな」って思ってたんだけど、そうじゃなくて。本当に行くとき子供たちがキラキラしてる。やっぱり自分が写真家だったら、そういう写真を撮っちゃうんだよな。

それは、行かないとわからなかった。地雷除去も、ここから先はもう地雷がいっぱい埋まっています。みたいなどころを一行になってカシヤカシヤ歩いて、暑い中一生懸命掘って「今日は二発見つかりました!」とか。そしてそれを爆破する現場に居合わせたりしたんだけど、五〇℃ぐらいあって、地雷除去するのにそんなに暑いんだっていうのも知らなかったし。現場に行くだけでも、はあくつてなるぐらい煙くて。でも、そういういろんなことを自分で体験して、これは続けられると思ったらやったらいいし、やっぱりこの現地の作業は現地の人に任せよう、俺はお金を集めるんだ、って思ったらお金を集めることにすればいい。なんだって応援できるし、自分ができることが見つかるから、JUST DO IT! ナイキ(笑)

質問者…ありがとうございます。自分も宮城県出身なので、被災地でいろいろあったのが、すごく要因なので、今年の夏にでも行ってみようと思います。

一青…やったあ! よかったら私も行くよ。

質問者…ありがとうございます。

四、パッションを持って、JUST DO IT! 自分ほどの分野で戦つかマッピングしてみる!

質問者(塾高三年男子Gちゃん)

僕自身のポリシーとして、最近話題になったりする情報社会という面で、これから大学を出て社会

に貢献するにあたって、小高さんみたいに新しく会社とかを動かしていく立場になって、そういう情報とさらに新しい世代に教育とか考えていきたいなと思っています。そういうかたちで、ある程度僕の目標の場所は見えてるんですけど、そのうえで僕自身も今、プログラミングとか勉強し始めてるんですが、今までお話を聞いた中で、JUST DO IT!とか

一青・小高…(笑)

一青…人の言葉って言う……

質問者…色々教わってやるのはたぶん大事だと思うんですけど、やってく中で、やってく順番だとかやってく選択肢だとか、選ぶ必要があると思うんですけど、そういうのはお二方は気持ちに任せたり、それとも先々見通し考えたりとかいうようなことはありますか？

小高…ビジネスの世界で行くと、たしかにこう、JUST DO IT!と passion みたいな、なるほど！みたいな話になってしまったのと。もちろんそれは大前提で、すごく右脳も大事ですし、確かにビジネスですと左脳も大事だと思います。その中でどういう実学を勉強すべきかというのは時代によって変わると思います。たとえば、一〇年前・二〇年前、そこまでインターネット・プログラミングじゃなかったかもしれないけど、今そうかもしれないとか。どういう風な原理原則とかで、ここをつつのか、どこをつつのか、どうポジションニングするか等考えたいうえで、passion を掛け合わせる、となるとビジネスモデルとして成立していくと思います。でもそれは、知識のレベルだけで進むと、GoogleとかAIも出てくるので、なかなか知識だけの積算だけだと勝ちきれないと思

うんです。そこで様々な、フレームを考えると、枠組みを作って自分がさらにロジカルに組み立てていくとか、社会に出ていくにあたって、いろんな人と話したりだとか、コミュニケーションしたりとかが大切になる。でも、相手の人間をコントロールすることはできないんですよ。それをどう説得するかとか、そういう場数を踏みまくるっていうのが、すごく大事だと思います。それが大学の四年間できちんと育っていけば、社会に出ても、社会は人の集合体なので、どう動かすかっていうところの礎ができるかなと思います。そう言った意味でも、コミュニケーションをとりまくって、プレゼンしまくって説得しまくるっていう、あとは説得されるっていうのは、すごく左脳の経験としてはいいんじゃないかなと思います。

一青…同じかな。ちよっと分野は違うけど、私で言うのと、自分をどうやって売り込むかってことかな、と。『優しい声』とか『パッション系の声』(笑)だとかをX軸Y軸にして分けていって、椎名林檎さんはこちらへん、ビーステュー・ボーイズはこちらへん、ステイビー・ワンダーはこちらへん、とかってマッピングしていく。そこで誰も属さない穴ぼこを見つける。中島みゆきさんの情念系までは行かないけど、井上陽水さんのようなちよっとした不条理さも持ち合わせつつ、ユブシを持って演歌とかもなんだったら歌えそうな、でも時には夏フェスに出たりしてちよっとぶっ飛び系の要素も入れて、自分で書いた詞で歌う、みたいな。さらには、この歌詞は、ユーミンで言う『春よ、来い』の世界だけど、一青窈だったらどう描くかとか、そういうマッピングは自分の中でしてるかな(笑)。

小高…すごい！

一青…それが、まずさつき質問があつた倉木麻衣に勝てない、どうする？ みたいな話につながつてくる。まず私は、死ぬほど歌が上手いわけではないし、天からユーミン様のように歌や詩が降ってくるのか、そういうわけでもない。じゃあ何ができるかというと、絶え間ない努力と情報収集しかない。真夜中の二時でも三時でも、閃いたいい言葉があれば、眠い！けど私はペンで書く。それを続けるってことかな。一日二十四時間三百六十五日。それをやらなければ、他にもやってる人がきつといるわけだから、その人よりもいい詩は書けない。なおかつ今は二人子供がいるので、授乳…眠い眠い！眠いけれども私は目を開けて書くんだっていう。

小高…すごい！

一青…ママタレントの方だつて頑張ってるじゃない。もちろんそこで張り合おうとは思ってないんだけど、なんかこうホントにチョットした細かい積み重ねです。それで、その下調べっていうのも、他の人が簡単にできるようなことはみんな百万人やっているから、それよりもできないことっていうのは、パソコンで調べた後に図書館行くでもいいし、図書館行ってる人もたくさんいるから、さらに古書店に行つてカギを見つけるとか。古書店なら古書店で誰も知らない古書店に出会うとか、古書店の店主と仲良くなつて私にとつて良い本、私にお勧めの本を「これいいよ」つて勧めてくれるまで仲良くなるとか、そういうところまで突き詰めていく感じですよ。

小高…書店でマニアックな本買つてるイメージだよ。

一青…そうでしょ。そこってなんかこう、ホントだったらパチパチって打って検索で出てくることかもしれないけど、そこでしか出会えない、それこそ人脈と一緒だよね。「窃さん、そういえばこの前言ってたあの写真集、出てきました」みたいな電話がかかってくると、やった！　みたいな。そういう、オタクの世界です。

質問者…ありがとうございます。場数を踏みたいと思います。

小高…高校三年生にしてこの質問すごいですね。

一青…すごいよ。

質問者…ジュリアナで踊ってるの見たかったです。

一青…仮想ジュリアナね。私もいつかあんな風に踊るんだ！　みたいな(笑)

司会…ちよつと私から。一青さんは、先ほど地図を描くみたいなおことをおっしゃっていたじゃないですか。そこで、こちらへんにはこういう人がいて、こちらへんにはこういう人がいる…：その中でご自分のやりたいことを見つけて、やってらっしゃいますよね。これは、全体を俯瞰する客観的なもの見方と、自分が何をやりたいっていう主体的な意思とを非常にうまく協調させていらっしゃるなと思います。それは小高さんの方も同じで、こういうことをやりたいということと同時に、場数を踏みなさい、経験を積みなさいというのは、やはりマッピングをしない、客観的にも

のを見なさいということだと思っんです。

それで今回、在学当時は無かったこの建物にいらっしやって……この建物は独立館といいます。それからこの並木道を逆に行ったら、日吉の逆側に協生館という建物があります。これらは二〇〇八年慶應百五十年の独立と協生というコンセプトに基づいて命名されていますが、お二人の話聞いていて、まさに「独立と協生」だなと思いました。見事に具現化なさってる素晴らしい生き方をされてるなと。

小高…予定通りです！（一同笑）

司会…やはり慶應義塾の教育はよかったなということ。

小高…恐れ入ります。

司会…では、ほかにもう少しご質問があれば受けたいと思います。

五、自分のやりたい事、情熱を注ぎ込む目的は何か。手段に振り回されない！

質問者（理工学部情報工学科二年女子Mさん）

お二人の話はすごく分かりやすくしてPOPで、頭に入ってきたり、楽しかったです。

お二人にそれぞれひとつづつ質問があります。

まず一青窈さんに。昔、自分の書いた歌詞を電話番号を付けて配ってた時に、やっぱり変な電話とかかかってこなかったんですか？ もしそれで、落ち込んだりとかしたときって、どうやって解

決したか、もしあればお聞かせ願いたいのですが。

一青…即答ですけど、一件もなかったです。何百部と刷って撒いたフリーペーパーでしたが、まったくそういうことは無かったです。誰も来なかった。それぐらい多分、甘かった。詩も何もかも。

質問者…次に小高さんに質問です。小高さんは在学中に起業はしていらっしやらなかったのですか？

小高…していませんね、企業で二年生からインターンをやりましたから。

質問者…なるほど。最近私の周りで、学生のうちに起業したいっていう子がいて、そういう子に対して、若いうちの起業っていうのは、どう思ってますか。

小高…まず、起業はあくまで手段だなと思ってるので、そもそも起業する必要があるんだったら起業すればいいと思います。だけど、起業したいと思うから、やるっていうのはやめたほうがいいと思いますね。それは大学二年生だからというのではなく、社会人になってもそうだと思います。なんか passion とか手段と目的が逆転しちゃって、なんとなく起業したら楽しそうだという感じになると、それは大きな過ちだと思います。逆に言うと、自分がしたいこと実現したいことがあって、この企業に入社すればできるということであれば、絶対その入社を目指すべきだと思うんですよ。三菱UFJ銀行に入れば、俺がやりたいことは実現できるぞ！ ブロックチェーンみたいなことができると、っていうことであれば、どう頭取になるかってことを考える。なので、逆に年齢に関係ないっていうか、起業が手段として最適であれば、それがいいんじゃないかな。そうであれば、起業を勧



めますってことかな。

質問者…わかりました。ありがとうございます。私は、将来はバーチャルリアリティの研究ができたらなと考えています。もしなにかあれば声をかけていただけたらなと。よろしければお名刺とかがいただけたらうれしいです。ありがとうございます。

六、あなたの強みは何？ 胸に気持ちがあふきに詰まっていれば、思いは伝わる！

質問者（経済学部一年男子〇さん）

僕は、バンドでギターをやってるんですけど、ホントに声が低いので、あのアーティストのコピーをやりたいなと思っててもなかなか難しいんです。なかなか演奏する曲も決まらないし。一青さんもそういうことってありますか？ 声が出ないとか？

一青…その声が低いのが強みだから、低い曲を作るとか。声低いのが、他の曲に合わないぐらい低いんだったら、強烈な強みだよ。だから、自分の好きなコピーしたい曲があったら、低い声のまま歌ったら、かっこいいじゃん。ねえ。たとえば、平原綾香さんなんかは低いところからものすごい高いところまで声ができるから、それが強みだし。でも……低い声、いいよ。色々作ればいいと思います。ちなみに何をカバーしたいと思ってるんですか？

質問者…色々なんですけど、だいたい基本的にはロックバンドのコピーなんです。

一青…ロックって「まあああああ！」って感じだもんね。

質問者…一青さんの曲のバンド構成ってどんな感じなんですか？

一青…バンド構成？ 私はねバンド構成：特にはないな、フリー。自分はジャズの即興と同じみたいなもんじゃないかな、アカペラでも歌えるし、ベース一本でもいいし、何でもいと思ってる。それこそ、伝えたい気持ちがあつて、伝わればいいと思ってるから。ピアノ一本で「百年続きますように」って歌もいいし、段ボール箱の上でアカペラで歌うのもいいし、（胸を指して）この気持ちで満々であれば絶対それは伝わるので。どんなにバックに百人のオーケストラを引き連れていても、ここがうわの空だったら、なんにも伝わらない。

だけど、なんにも伝わらないでいいような音楽もある。それこそCDの音源流して、踊ることで、その可愛さをギャップにさせるっていう手法もある。それはその人たちが、可愛くてスタイルがいつていうの強みにしてるからね。声が低いのを強みに表現できることを探されるといいと思います。

質問者…ありがとうございます。

七、人同士の理解・交流には時間がかかるが、あきらめないうで伝え続けることが大切！

質問者（他大学一年生男子Tさん）

まずは慶應義塾大学の関係者の皆様に、今回一般の参加が可能という形をとっていただいて、本当にありがとうございます。

実は、在学中の大学には、まだちょっとしか通ってないんですが、あれ？ っていうことが多いんです。実はSFCにすごい興味があって、AO入試を考えていた時期もあったんですが、SFCっていう学部は知っていたけど、どういった学部かということは今全く知らなくて、すべてが終わったころに色々な情報を見て、あ、ここ良いなと思いました。チャンスがあれば受験も考えたいなと思っています。

今日お二方がお話しされたことで、気付いたことが色々ありました。現在は先ほどお二方が言われたようなことを心に、毎日感性を磨きながら生活しています。感性を磨こうと考え始めたときに、自分とよく向き合うようになって、さっき言われた、文字で書いてRe Thinkをしてっていうのは、僕も大事だなと思って毎日やっています。

すごく自分と向き合うようになった中で、先ほど言われた独立と協生の独立の部分が大事だなと。何をすることも自分を独立させないといけないなと思いはじめました。それは他人との関係もそうですし、たとえば結婚という形をとるときに他人とLifeをシェアしますよね。そのためには、他人とLifeをシェアする前に自分のLifeがインディペンデントになってないと、どちらかに偏ってしまいうなと考えたりします。

結婚以外にも、社会に出ると、他人とかわることが多くなりますよね。そうなった時に、少し前まで自分には色んな気付きがあった。でもその事に気付かない人ももちろんいて、そんな気付きがない人と関わるときに、少し前までは、どうしてこんなに気付かないんだろうってびっくり思ってい

たんです。でも現段階での結論は、そういう人たちとも関わらないといけない社会にいますので、協生が必要だと思うんです。自分は独立しているけど、日本だと社会の中で協生をしなきゃいけない。

そこで、他人との関わり方をどうされているかお聞きしたいんです。自分は個人的に社交辞令がすごい大っ嫌いなんですよ。それは、人にとって言葉というのがすごい大事で、社交辞令は言葉を濫用している、と考えています。たとえば飲みに行って、また次行きましようみたいな。

一青…行かんよ！ みたいな。

質問者…そうなんですよ。こっちは行く気もないし。そういった他人との関わりをどうしているのかお聞きしたいです。

小高…おもしろいですね。そうですね、特にビジネスの世界では、そこは一定程度調整したほうが共生はしやすいと思いますね。

「ああ君、君とは意味ないから話しません」みたいなのはちょっと、というのはあるとは思いますが、やっぱり、社会に出るとすぐくわかんと思うんですけど、時間が一番有限な資産なんですよ。時間は無尽蔵ではないので。

さっきの話の飲み会とか交流会みたいなものを月一〇回二〇回ぐらい行きまくっていた時期に、一回行くと大体こうわかるわけですね。もう一回行って意味があるのか、いい意味で意識高い人たちが揃っててちゃんと話せる会だとか、それがあまりなかったら次は行かないとか。でも、行ってみ

ないとわからないから、行かないことで損してるとか機会をロスしてるとかいうのもあると思うので、僕は、手当たり次第に行つて、それから取捨選択して自分の時間をどう使うかというのを考える。それで、その局面局面でドライに処理する。超攻撃的に言う必要はない。「こんな会も来ません！」なんていう必要はないと思う。そこは一応社交性があつたほうが、調整力あると思ひます。そういう軸で考えると、自分の時間をどこにどう使つていくと、すごく人生として意味があるつていう風になるし、そこは独立的に自分で判断していいと思ひます。

一青…なんかすごい難しい言葉がいっぱい出たけど、私で言うつと、来るもの拒まず去る者追わず、なので。どういふことが悩みでした？

小高…他の人と付き合ふのを社交的にやりすぎるのも、疲れるしつていふ。

一青…一つ言うつと「なんで解つてくれないんだらう」つていふのは、わかつてもらえるように説明してない。それは自分の相手に対する礼儀も含めて自分のことを解つてもらつたための労力や時間や丁寧さが欠けている。それは向こうも思つてると思ふんだよね。なんで私のことをもつと解つてくれないんだらうつて。やつぱりそれじゃ、距離が縮まんない。恋愛もそうで、なんでこんなに想つてるのに返事が来ないのかしらつて。思つてるだけつていふのは、ただただ独りよがりでしかなくて、好きならその好きな気持ちをもホントにウザいつて思ふぐらい伝えたいと思ふのね。ひよつとして振られたら怖いつていふのも、振られた時に考えればいいと思つてさ。あんなこと言われたらどうしよう、こんなこと言われたらどうしようとか、こんなこと言われたらどうしようとか、こんな風に思われたらどうしようとか、自

分の思い込みでしかないのね。だから、伝わってないなって思うんだったら、どうして伝わんなかったかっていう理由をもうちょっとコミュニケーションをする必要がある。ああ自分と価値観が違うんだっていうことも含めて、相手はこういう人なんだっていうことを認めて、僕はこうなんだよっていうことを説明していくと、コンフリクションというか摩擦も減っていくから。

やっぱり基本的には、人は一人で独立してる。すべての人は全員違う考えを持ってて、でも一つの地球というところで生きてて、良くしようって思ってるんだから。気持ちの立ち位置としては、いろんな人と交流できた方が、私はハッピーだなって思ってる。こんなんでできるのになって思ってる。孤立すればするほど、やっぱり寂しくなっちゃうから、私は伝えたほうがいいと思うな。で、嫌われちゃうのもやっぱり、うまく伝わってないからなんだよね。それで、嫌われる理由があって、そこを諦めちゃったり匙を投げるんじゃないかな。やっぱり人間同士だから伝えるのには時間がかかると思うんです。そういう意味でも大学って素敵で、時間かけて喧嘩したり、やっぱり人と付き合ったり仲間を見つけたりできる場所だから。

小高…いやあ、戻りたい。青春をもう一回、入学したいよな。

一青…だから、大学のころに凄く仲良かった子でも、卒業してから離れちゃう子もいるわけで、それはそれで、考え方が違っただけだから。あの…：せっかくね、この何億人も人がある中で、出会ったのってすごいことだと思っんです。結婚も同じで、まあ何度でも（笑）私は一回でいいと思ってますが。毎回全力投球でこの人には伝えて伝えて伝えきったけど、やっぱり自分の事解ってもら

えなかったと思ったら、初めて諦めれば良いと思う。

それで、それぐらい一生……この人しか知らないってまま生涯を終える人もいるけど、それが私は、すごく素敵なことだと思ってます。もちろんいろんな人と出会っててどんどん自分の利益になるように吸収するのもいいけど、生涯にたった一人の伴侶や友人に出会えたり、学びの友を得られるって凄いいことだと思うから。コミュニケーションを諦めないで悩みきってですね。

小高…結婚っていうことで言うと、ぼくは完全にコントロールされてる側なんですけど。だから社に出るしていくときに、ビジネスもそうだけどプライベートもそうであって。そこは結構、僕の中で切り分けてるかもしれないですね。結婚生活は不思議で、僕は別に独立はしてないんですけど、結婚生活では。完全に共生の字が違うんではないかという強制で。

司会…「きょうせい」って共に生きて生きたりじゃなくて協力して生きるの方なんです。

小高…一青…ああ協力して生きる。

小高…なんだろう、こういう問題提起をしてくれて質問してくれること自体すごくブレインストーミングですね。

一青…真面目に向き合ってるんだよね。

小高…さっき話した、感度とか、こうしたいとか、思いがあることが大事で、そこは△じゃない人間であればこそその感情をベースに考えて、どんどんぶつかり稽古してほしいですね。

一青…でも、あの、ひょっとしたらSPECに入ったあとで、SPECも違ったと思って、元々いたこ

るがすごくいいように思えるかもしれない。それって、スピニアウトするけど、どこか事務所に入っていて、他の事務所、例えばエイベックスが力がある、もつと自分の事売り出してくれるんじゃないかなって、私がユニバーサルじゃなくてエイベックスに行くって言った時に、そういう気持ちでいると社員の人たちにも気持ち伝わるから、一青窈を売り出そうって気持ちにはならないと思うんだよね。もう、「私はこの事務所を骨をうずめる。このマネージャーに命を懸ける、命を捧げる」っていうぐらいの気持ちでいると向こうにも伝わるから、「よし！この子を売り出そう！」ってなっていくわけなので。あっちの方が良さそう、こっちの方が良さそうってフラフラしていると、結局、二兎を追う者は一兎をも得ずで、そこにいる人間に対して自分が忠誠を尽くせば、必ず返ってくるから。今いるところもひとつとしたらすごく自分のことを理解してくれる人がいるかもしれない。でも、色々見た中でやっぱりSECが自分に合ってるなと思ったら、移るのもいいと思う。どこにいても必ず出会えるし、自分とは合わない人もいると思う。

質問者…ありがとうございました。

司会者…先ほどの「協生」のことで一つ笑い話がありました。あまり聞かない言葉ですね、協に生きたるって。それで、OB・OG会を協生館のパーティールームで開催したところ、昔のOB・OGたちはそれを知らなくて、生協の方に行ってしまったという。

(一同笑い)

一青…おお〜！



司会者…協生をひっくり返すと生協ですから、生協食堂の方に行ってしまったと。そういうことがありました。

小高…さすがだ……

八、本当に好きなことなら、モチベーションは消えない。自分を客観視することが大切！

質問者（法学部一年男子Mさん）

きょう本当に、実は謝らないといけないんですけど……実はミーハーです。

一青…なんで、いいじゃないですか。私もミーハーです。

質問者…子供のころから、新垣結衣さんに命を懸けてて。

一青…いいじゃないですか、それも。

質問者…映画の『ハナミズキ』を拝見しまして、それで一青先輩のことを知ったんです。

一青…一青先輩、恥ずかしい（笑）

質問者…『ハナミズキ』の映画の中で、曲がいいなと思って聞かせていただきました。それで、きょう来て、小高先輩のお話も聞いて、なんで自分は、そんな軽い気持ちで来たんだろうと……

（一同笑）

小高…いやいや、かっこいいねえ！ いいよ。

質問者…お二人のお話を聞いて、大げさじゃなくて視界が広がりました。それで聞きたいんですが、

自分は塾高でポート部に入ってたんですけど、続けてく中でモチベーションを保つのが大変でした。  
一青…ポート部で。

質問者…お二方は、自分の好きなことをされて、情熱をもってやってらっしゃると思うんですが、その中でもライバルがいたり、辛いことがあったり、行き詰ったりした時に、どうやってモチベーションを保たれてるのかなと思いました。

一青…モチベーション……

小高…あー、そうですね……そうですね、凹むこともあるし。でも、あえて言うとする、もちろん *passion* があれば、ということもあつつつの話なんです。僕、戦国時代が好きなんです。

一青…デジャビュ(笑)

小高…戦国時代に比べれば……

一青…あはははは！

小高…視点がちよつとおかしいんですけど(笑)、戦国時代に比べたら、マシかなと思ったりします。明日敵が攻め寄って来て、殺されるかもしれないという世界観・生死観で生きていけば、それだけでもけっこうなとかなります。あなたは今の時代、二十一世紀で生まれになって……

一青…それは何？ 漕げってこと？

小高…そうそう、漕げっていうか、凹んだりする件もさっきの話のように俯瞰してみると、そもそも時代とか考えたときに、今生きているのは超ハッピーだなと思います。僕は、さっき話したみた

いに五人兄弟で末っ子で生まれたけど、超ハッピーですよ。

あなたはここで慶應に入れて、法学部一年っていうのもすごくハッピーだし、日本というところに生まれた時点でハッピーだし、戦国時代の武将よりハッピーだし。

一青…たははははは……

小高…ほんとに高々数百年ずれてたら、殺されてる可能性もあるわけです。ほんと、明石家さんまさんじゃないけど「生きてるだけで丸儲け」なわけです。発展途上国の人達と比べてもすごく恵まれている。いろんな悩みとかあると思うんですけど、僕は、戦国武将の悩みと比べるとすごく小さいと思えるんですよ。僕はそういうやり方で、人間関係とか仕事とか色々ありますけど、すごくちっちゃいなと、乗り越えられるなというか……まあ、どうでもいいよねという風に思うようになりました。それは訓練として意識してやっています。だから、色々あってもそれは乗り越えられる壁で「まあ、武田信玄よりは楽だな」って感じですよ。

一青…わかんない(笑)

小高…「信長の本能寺の変より楽だな」とかっていう風になったり。これは人によってやり方があって、強制的はしませんけれども。そういう消化の仕方は、もしかしたら、生きる中で経験によって、歳を重ねることで見つけられるノウハウじゃないかと思えます。だから、自分の中でなにか凹んだ時の消化の仕方を見つけれられると、すごくやりやすくなるんじゃないかと思えます。

一青…モチベーションが、保ち続けられないの？ ポートを漕いで「辛いっ！」って。

質問者…大学では続けないつもりなんです。高校の時に、自分ではやり切ったんですけど。ほんとに辛くて、その時の気持ちは今も同じですね。

一青…なんか簡単に、やめたらいいんじゃないかな。それじゃだめ（笑）？ 辛いつて言うのはなんか違うもの。他の部活には、入ってはないんですよね。

質問者…高校は完全にボートだけでしたね。

一青…私はずーっと歌だったから。大学でやめようっていうんだったら、今辞めちゃう。私ならね。やめて違う好きなものを見つけちゃう。

小高…もしかしたら、心底好きなものじゃなかったのかもしれないですよ。

一青…あのね、好きなことでも、もちろん辛いことはたくさんあるよね。君が、自分の歌だけで勝負する。っていうポリシーを譲って、もうちょっと可愛く愛想振りまいてくれるなら、CM一本出られそうだけはどうする？ みたいなこと言われて……いやっ！ やっぱり無理です！ みたいなので逃げ出すこともある。

小高…むっちゃおもろいねえ……（笑）

一青…そして私は、デビューが遅めで色々焦ってたから、自分が折れることでチャンスが来るなら……とかいろんなことを考えながら、夜道をこう、裸足でこう……。パンプスだとね早く走れないから、こう、パンつて投げてバースト走って……「CM欲しい……あああああ！」って（笑）。そういうのとか色々あるけど、でも結果そこで屈したら、ずっとそうなるだけで。私が本当にしたいこ

とは何か？ そう、私は膝を抱えてる人に歌を歌いたい。そこは曲げない。みたいなそういうことを考えたりにしてね。

だからそのなんか、ボートがすごく好き、キツイキツイキツイ、でも僕はボートを漕いだ瞬間に見るこの景色が大好きなんだ！ というのがあれば、必ずそれは、もう一回漕げる。でも、モチベーションが今、ふわふわしてるから漕ぎ続けられないのは、なんでこんなに辛いんだろっていうのだけがあるから。そこに自分で一個、この景色があるから続けられる、あるいは、マネージャーの笑顔が見れる、とか、ガツキーのようなマネージャーに会える、とか、何のきっかけでもいいけど、あれば続けられるんですよ。続けられることでないならば、やっぱりそれは本当に好きなことじゃないんじゃないかなと感じます。

小高：戦国時代の足軽よりは苦しくないかもしれない。殺るか殺られるかというのものないしね。（一同笑）

質問者：ありがとうございます。

九、一青の情熱、小高奈皇光の異分野での先進性、牛場潤一の人間力。

質問者（理工学部システムデザイン工学科二年男子Kさん）

せっかく対談形式なので、お互いがお互いの一番好きなおところを知りたいです。

一青：ええーっ！

質問者…よろしくお願ひします。

一青…好きなところ？ 褒め殺していけばいいの（笑）

質問者…一番好きなところに絞って、詳しく聞きたいです。

一青…好きなところ……

小高…えー

（一同爆笑）

一青…濃いな……えっと、私から先に言うと、全然関わりのない異分野で活躍しているので、会うと、さっきのなんでしたっけ、ブロックチェーン？

小高…ブロックチェーン。

一青…ブロックチェーンみたいな知らない言葉を教えてくれるわけ。「え？ ブロックチェーンって何？」「バーチャル会議って何？」みたいな。その、自分に無いけれども、そこを楽しんでる奈皇光がいて、その…なんだろう、話が聞けるっていうのが私は、いいな…って思ってた、たまーに会う。（笑） それぐらいの距離感だよな。

だって私、奈皇光の奥さんに会ったこともないし。ホントに学生時代の友達。こうやって肩並べてるだけだから、どんな苦労を経てここにいるのかも知らず、奈皇光が泣いてるところも知らず、怒ってることも知らないの、いい友達だな。

小高…そうだね。

一青…で、どうぞ。

小高…えー、そうですね…でもほんと、窈とは、たまにこう飲むというか。で、やっぱりそこそ尊重・榮譽じゃないですけど、尊敬してます。リスペクト。それに、こんなにイカれた passion 野郎じゃない、passion 女子なのかな？　なんて言うんですかね、こういう人は他にはいないですよ。これは生き方として、凄くカッコいい。ほんとにリスペクトしてますね。それで窈が、やっぱりその、二〇〇〇年卒業組の代表格として活躍してくれてるので、そこはなんか好きなことだし、好きを超えてホント尊敬に値するということか……

一青…もうひとつ合わせて言うと、そこにいるウツシー（牛場准教授）も私は、いい友達だと思ってる。それは何がかというところ、やっぱり人間…何でしたっけ、何をやってらっしゃるんです。牛場…脳科学です。

一青…私、友達に車椅子の男の子がいるんだけど、彼が下半身不随で、神経が届かないから首から下が全く動かないんだよね。そんな時にウツシーが「ちょっと僕がやってる研究が役に立つかもしれないから」って言って、その友達に会いに行ってくれたりするわけ。そうすると、ここから動かなくなった私の友達の手が動くようになるのかな、とかそういう尊敬できる分野を研究しているのがすごいな。最初はバンド仲間だったんですよ。

牛場…そうね、一緒にバンドをやっていました。

司会…牛場先生、簡単に自己紹介をお願いします。

一青…何の楽器やってみました？

牛場…理工学部で生命情報学科の准教授をしています牛場です。窃ちゃんとは、僕は一コ下の学年なんです、大学の時に一緒にバンドやっていました。僕はトランペットを吹いていて、窃ちゃんに歌ってもらっていたんです。

小高…ええっ！ トランペットでバンドですか。

一青…そう。バンド仲間で、この真ん中には幼稚舎の先生がいて、ジェームス・ブラウンのコピバンをやっていた。歌って倒れるっていう人の後ろで、私はコーラスをやっていて、ウツシーはトランペットを吹いてたっていう。それで、後々になってこういう研究してるんだと知って、私の友達のなんかこう、手助けをしてくださったっていうのかな。だからその友達は、ウツシーにとって友達の友達みたいな感じね。

尊敬していると同時に、ただの友達でもあるし、ご飯食べるっていうだけでもあるし。なんか…：…あります、私の好きなのところ。

牛場…きょう話を聞いていて、大学の時、そうだったなーって、僕は思い出しました。窃ちゃんのこと僕がずーっと好きなのところは、やっぱり学生の時から、「これがやりたーい！」とかいうのものすごくこだわって、やり続けるっていう姿勢かな。寝ても覚めてもそのことを考えて、もつといいことができるだろうって考え続けてたのが、凄かったな。

一青…そう、ウツシーには車椅子の人のためのイベントとかにも出してもらってた。イケてるイベ



ントって、なかなか車椅子の人が行けないから、そういうイベント打とうよって言って、トランペツト吹いてもらったりしてた。

牛場…やりましたねー。

一青…「そういうイベントがないなら作ろうよ!」「OK!」みたいな、そういう関係です。

牛場…そういうのをこだわって一緒に、つくっていく。そういう小さなことでも「僕らはこういうことを表現したいんだ!」っていうのを学生ながらに青臭く、一緒に、真剣に考えてやっている姿勢っていうのが、むちゃくちゃや当時から濃度高くて濃くて、僕もやっぱりそれぐらい passion をかけてやりたいっていう事があるし、それをやっぱり追い求めたいよなって、そういう部分に共感してました。分野は違うけど同じ考え方をしたんだなって、今日も聞いてて思いました。だからそこがすごく僕は、窈ちやんを尊敬してるところだし。こうやって会うのは久々なんだけど、昨日すぐ横に居たかのように思い出して…:…なんか一生友達だなっていう感じがしています。

一青…じゃあウツシー、奈皇光の好きな部分は(笑)

小高…初見ですよ(笑)

一青…二時間前に初めて(笑)

牛場…ぼくねー、今日初めてお会いするんですよ。(笑) お話を聞いて、ホントになんかこう、シャープに言葉を紡がれる方だなと。

小高…もう無理に、おほめいただいで(笑)

一青…アハハハ…：

牛場…もう、すぐ友達ですね。すごく共感しました。

小高…ありがとうございます。

一青…ということでした。

質問者…ありがとうございます。なんか心がほっこりしました。

司会…牛場先生、突然出ていただいて、どうもありがとうございます。

一〇、世界は変わる。労働から解放され、大好きなことを情熱をもってやる社会へ！

質問者（理工学部情報工学科四年男子不さん）

みんな大学卒業したらというか、卒業する前からスーツとか着て就職活動始めますよね。そのあと社会人になったら、スーツ着て、満員電車に乗って会社行ってみたいな人が日本では多いと思うんです。そういう状況は、将来的には変わっていくんじゃないかなって思っているんですが、お二人はどう考えますか？

小高…おっきい質問ですね。僕、結構そこについて話したいかな。

一青…話して、話して。

小高…でも、だいぶ危ない人に思われてしまうかもしれない。まず交通システムは、すごく変わると思います。そもそも出社の意味ってだんだん薄れてきて、今の世代も思ってるように、もうリモー

トで仕事でもいいんじゃないかな。よくよく考えれば、アメリカなどでは結構リモートは多いんですよ。だって、広すぎるし。

一青…リモートでどうやってワークしてるの？

小高…イェントウアーネットで。

一青…イェントウアーネットで？（笑）

小高…インターネットで仕事して、それを△ならぬ動画会議でやっています。僕も最初は慣れなかったんだけど、大画面で動画があると結構話せるんですよ。それが超高精査な動画になると、いま僕と筋と話してるとような感じに、だんだん人間は錯覚するようになる。いまのようにテクノロジーが増えてくる、技術が上がってくると、我々の会社も、もうリモートでの動画会議だったら、ほぼ普通のミーティングと変わらない感じになっています。だから、出社ってホントに意味あるのかって言うふうになりつつあります。

将来的には、もしかしたら満員電車は無くなるかもしれません。

でも営業で、最後、クロージングする時などには、リアルでたまに会うとか、そういう時代が来ると思いますね。ですが、あと五年か一〇年はかかるとは思いますけれど。それ以上のことも、実はちょっと話したいんですけど、そろそろ時間が……

司会…もう少し大丈夫です。

小高…ここからさらに危なくなってくるんですよ。そもそも、働かなくていい時代が来ると思っ

います。

一青…何それ！（笑） どういうこと？ 全部機械がやってくれるってこと？

小高…正確に言えば、究極には、人が死なくなる時代さえ来得ると思ってる。あ、特に宗教の勧誘じゃございません。なんか教祖みたいだけど。

一青…でもね、解らなくはない。そういうことね。

小高…わからなくはないでしょ。アニメとか映画とかで描かれているように、脳が死ななければいって考えると（首を指して）ここから下は機能じゃないですか。コンピュータだってCPUが生きてれば、キーボード入れ替えて、ディスプレイ入れ替えてつてして、そこはリプレーサーブルです。しかも今、DNA細胞で体のいろんな部分で作れちゃったりする。

でも、脳だけは死んでいく可能性があるので、ぼくは将来脳活って言葉を掲げようと思ってるんです。いかにシナプスを伸ばし続けるかっていう、婚活、なんとか活、脳活みたいな感じで。その時代には、たぶん食料もAIで自動で生産されて、それが自動で送られてくる。自動運転で。それで、はむはむ食べてるみたいな。たまに内蔵、肝臓とか入れ替えます……みたいな時代が百年二百年で考えると出てきてしまうんだろなと考えています。そうすると労働って何？ って話になる。そこで僕が言いたいのは、たぶんメシを食うための労働から解放される時代が来ます。それも、もう二、三〇年ぐらいで。そうなると、好きなことをやっついていいよってなるはず。別に月収二〇万必ずしも稼がなくなたっていいんです。

一青…え、じゃあそこにいる画家とか歌い手とか、そういう人たちは、どういう状態なの？

小高…それこそ、アートの時代が来るとおもってます。

一青…おぉー。

小高…だから今、僕はエンタメをやってるんだけど。

一青…なるほどー。

小高…芸術家、絵を描くとか表現したい歌いたい歌詞を作りたい、みんなそれをやるべきだという時代がくるんですよ。そういうアートの時代で自己表現する方々と、もうひとつテクノロジー的には宇宙とか、そもそも人類にとって完全に未知な、たとえば生命の秘密とかを研究する方面に行く理系な方々が出てくる。……やっぱり危ない話になりましたね。

一青…大丈夫、面白いよ。

小高…数十年スパンで考えると、そうなるとおもいます。さっきの通勤問題はここ四、五〇年ほどかかるけど解決すると思います。

一青…(質問者に)心配しなくて大丈夫だよ。

小高…五〇年ぐらい経てばですね、

一青…これで、解決しちゃった？

質問者…あとは、たとえばスーツを着てる人が多いんですけど、スーツではなくて私服で仕事する人が増える時代って来ると思えますか？

一青…え？（小高を見ながら）もうしてるよね？

小高…そうですね。きょうは、最上級のフォーマルですよ、僕。

（一同笑）

小高…これ、Tシャツ。これ便利、こういう感じで。

一青…みなさん、これがオタクモードのTシャツ？

小高…東京オタクモードって書いてありますけど、

一青…プロモーションだ（笑）

小高…僕、普段はカーフも穿かないですし、夏は短パンですね。

一青…じゃあその、スーツとかを着て満員電車に乗るのが心配だなんてこと？

質問者…そうですね、正直言って、この社会に出るのは正直怖いなんて思うこともあるんです。

一青…えっ？大丈夫だよ、絶対。私、スーツ着たことないもん。就活もしてないし、でも、あの、理工学部なんだよね？

質問者…あ、そうですね。

一青…それ、スーツ着る可能性高いの？ 無いの？ でもまあ、研究者だったらそういうこと無いのかな。

質問者…そうですね。僕はいま、研究室にいます。博士号を取った人で、研究員の職を得て給料をもらっている人がいたりするんですが、そういう人は、ほんとにいつも私服で来ています。午

前中はいなくて、午後になってからから来るとかいう生活を送っている人もいます。

一青…スーツは着たことあるの？

質問者…ありますそれは。

一青…それで、着た時にキツイなと思ったの？

質問者…いや別にキツイとか、そういうことではないんです。でも毎日……

一青…そうか。でも、もし女子にモテたいとかがあつたら、意外とスーツ男子モテるし、通勤の時着ないで、ここぞという飲み会の時とかにスーツ着たら「あれっ？　いつもダルダルの○○君が……」って。

小高…あの、ギャップ萌え感。ここぞという時は、スーツですよ。ほんと、勝負するなら。

一青…そういう着方もできるし、満員電車に乗らずに仕事してて、たまにそこに窮屈さを感じて、真面目に通勤している人の気持ちを感じようって時に満員電車に乗ったっていいし。

小高…僕ね、逆に普段が⇒シャツじゃないですか。すげえスーツ着たくなるんですよ、たまーにだけ。僕的には、超コスプレなんです。サラリーマンコスプレとか。でもスーツでパチッとネクタイ決めて、パツパツって行けば、それはそれでいけます。だからいまは、そう思ってるかもしれないですけど、

一青…いつか変わるかもね。

小高…変わるかもしれないですね。

一青…変わるかもしれないし、うーん……

小高…逆に私服のほうが困ったりするよね。何を着ようかなとかってね。

一青…この話はこれ以上してもあんまり……

小高…締めがこの話でいいのかってってね。

(一同笑)

一青…でも大丈夫。大丈夫、大丈夫。そういう未来が待ってるし、スーツ着る人生も送れるし、着ない人生もできるし。

質問者…両方送れるってことですね。

一青…両方送れます。大丈夫です。

質問者…ありがとうございます。